O2-024

乳幼児健診の間診項目を活用した幼児期の甘い間食の習慣化と生活習慣の関連性の分析

佐々木 溪円¹⁾、羽入田 彩花¹⁾、石田 尚子²⁾、山崎 嘉久²⁾、石川 みどり³⁾

実践女子大学 生活科学部 食生活科学科¹⁾、
あいち小児保健医療総合センター 保健センター²⁾、
国立保健医療科学院 生涯健康研究部³⁾

【目的】 乳幼児健康診査（健診）の間診項目を用いた縦断分析による、幼児の甘い間食の習慣化と生活習慣との関連性の評価。

【方法】 対象自治体は、1歳6か月児健診（1：6）と3歳児健診（3：0）の間診回答を同一児で連結可能な愛知県内30市町とした。2013～2014年度に1：6を受診し、2015～2016年度に同じ市町で3：0を受診した34,030人を解析対象とした。間診項目のうち「甘いおやつ（砂糖を含むアメ、チョコレート、クッキー等）をほぼ毎日食べる習慣がありますか」と「甘い飲み物（乳酸飲料・ジュース・果汁・スポーツドリンク等）をほぼ毎日飲む習慣がありますか」のいずれかが「ある」の場合を、「甘い間食の習慣化」が「あり」と定義した。「甘い間食の習慣化」について、1：6と3：0のいずれも「なし」の者を健康維持群、1：6のみ「あり」を改善群、3：0のみ「あり」を悪化群、1：6と3：0のいずれも「あり」をリスク維持群とした。地域健康度（継続群が全体に占める割合）を用いて市町間の比較を行った。各市町について、「甘い間食の習慣化」のカテゴリを従属変数とし、1：6での生活習慣を独立変数とした多項ロジスティック回帰分析を行った。従属変数の対照カテゴリはリスク維持群とし、独立変数の対照はその他の望ましくない生活習慣とした。

【結果】 全対象者の構成比は、健康維持群：改善群：悪化群：リスク維持群＝27.9：8.5：25.5：38.1であった。各市町の地域健康度の範囲は14.8%～39.4%であり、24.6ポイントの差が市町間に認められた。各市町によって、「甘い間食の習慣化」と有意に関連（ $P < 0.05$ ）する生活習慣は異なっていた。健康維持群で有意な正の関連があり、悪化群で関連がない生活習慣の該当市町数は、「スクリーンタイム＜2時間」が20市町、「就寝時間＜22時」が12市町、「同居父の非喫煙」が10市町、「就寝時授乳なし」が9市町であった。「同居母の非喫煙」が該当した4市町では、そのオッズ比は「同居父の非喫煙」より高値であった。

【考察】 甘い間食の習慣的な摂取状況には市町間格差があり、摂取状況と関連する因子は市町で異なっていた。乳幼児健診で得られる情報などを活用して各市町の地域診断を行い、その特徴に基づいて施策立案や評価をすることが重要である。本研究は、成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業「幼児期の健やかな発育のための栄養・食生活支援ガイドの開発に関する研究」として行った。